

第106回読書会報告

僕の叔父さん網野善彦 集英社新書

担当 高橋あかね

「僕の叔父さん網野善彦」は著者中沢新一が叔父である網野善彦（網野善彦は中沢新一の父の妹・真知子の夫）との長年にわたる知的交流の中で話し合った様々な事柄について論じるだけでなく、博識で優しかった叔父さん網野善彦の人柄を忍んで彼にささげた鎮魂歌ともいべき作品です。著者の中沢新一は宗教学者で東大・大学院人文科学科卒業後チベットに渡り、チベット密教について学びました。帰国後は「チベットの死者の書」などを紹介してスピリチュアルムーブメントが活発な活動を繰り広げていた1980年代の日本社会で、そのユニークな視点から紡ぎ出される思想はもてはやされ、若きオピニオンリーダーの一人として活躍していました。しかしながら1990年代にオウム真理教が松本サリン事件、地下鉄サリン事件、坂本弁護士一家殺害事件などを引き起こし、その危険な実態が明らかになり、糾弾されるに及んで、1980年代から90年代にかけて「チベット密教の修行によって得られるビジョンを宣伝して多くのオウム信者が彼のもとに引き寄せられていたにもかかわらず、彼等の活動に警鐘を鳴らさず好意的な態度を示した」とメディアで批判され大衆的人気は衰えました。彼はその後も宗教学者として研究活動と執筆活動を続け現在は中央大学教授として後進の指導にあたっています。彼の今後の動向を注意深く見守って行きたいと考えています。

「僕の叔父さん網野善彦」を読んでまず驚くことは中沢新一と網野善彦の会話だけでなく中沢家の家族（中沢新一はじめ父やその弟達など）が交わす日常会話が専門家の論争の様相を呈しているという実在の知的刺激に満ちているということと、その会話の内容が多岐にわたっているということです。彼等の会話の雰囲気と内容のすべてをここでお伝えすることはできませんが、歴史学者網野善彦が主唱したいいわゆる網野史学について多くのページがさかれていますので、旧来の日本史の歴史観とは異なる網野史学について簡単に紹介してみることになります。

網野善彦はまず、日本が孤立した島国で外国からの影響を受けにくく、単一民族で構成されているという考え方は幻想に過ぎず、太古の時代、日本列島は弓状の一続きの陸地で大陸とつながり日本海は湖でこの時に南方からも北方からも多数の渡来人がやってきたことに始まって、古代、中世、近代、現代にいたるまで海外から多大の影響を受けてきたということを具体的事実を列挙して主張しています。また日本は弥生時代より水田で稲を生産する農業を基盤として発達してきたという歴史観にも疑問を呈し、農民と分類されている人々の多くが非水田耕作に携わり、桑、綿花、雑穀、薬草などの栽培、織物業、鋳業、その他農家の副業と分類されてきた様々な手工業に従事していて、これらの産物を年貢として納める稲と交換するために農村にも貨幣経済が流入していたことに着目しています。

また農民以外の職人について従来はあまり注目されていませんでしたが、彼らの活動にも興味を示し日本史の動向に彼等が与えた大きな影響を示唆しています。網野善彦は職人という言葉は南北朝以降「手工業に携わる人々」という定義のもとに使われるようになっていくが、平安時代、鎌倉時代にはもっと広い範囲の人々をも包括する概念であったことを指摘しています。職人には陰陽師、医師（くすし）鍛冶、巫（かんなぎ）刀磨（刀とぎ）博打、海人（あま）、山民、商人等々が含まれ、彼らの多くは農民と違って住居の移動も自由で年貢も免除されていて「アジュール」という自由な社会を構成していたことを網野善彦のみならず中沢新一も熱意をもって述べています。「アジュール」という自由な社会の実態に関しては今後さらなる検証が必要と思われるが、第二次大戦後の農地解放の際に農地は小作人に開放されましたが網野善彦が山民と述べている人々によって管理されていた山林は開放されず現在に至っているという事実などを指摘されると、封建体制に緊密に組み込まれてない社会が存在していたことが推測されます。

また網野善彦が都立北園高校の先生をしていた時に「源頼朝も織田信長も天皇を消滅させてしまえる立場にあったのに天皇を利用する方向を選んだ」と教壇で話したところ、生徒の一人が「先生は日本人がどうして天皇制を消滅させることができなかったのか？という本質論をのべなくてははいけない。やむを得ず天皇を利用したという言い方では従来の皇国史観と同じだ」という指摘を受け、天皇制が平安時代以降、政治的権力者にその地位を篡奪されることなく現在に至るまで続いているのは何故かを考え続け、この問題は網野史学を継承する研究者達に引き継がれ、天皇制は平安時代以降いわゆる「職人達」のバックアップのもとに伝統諸芸、宗教活動を掌握し大衆の圧倒的サポートと荘厳な文化力を獲得して政治権力者に対峙した、という考え方があることを最近新潮社から出版された「天皇はなぜ滅びないのか」長山靖生著という本で知り大変面白い指摘であると思いました。

網野善彦がもっと長生きをしたら中沢新一とのプロダクティブな会話は延々と続いて興味深い事柄についてさらに書き継がれていただろうと思ひ、それが網野氏の死去によって断ち切られてしまったのは大変残念です。

「僕の叔父さん網野善彦」を読書会のメンバーと一緒に読むことによって、従来の歴史観とは異なる網野史学の片鱗に触れ、日本史に対する興味を喚起されたことは大きな収穫だったと思っています。